

Title	原因と理由 : 行為の因果説と反因果説の対立の三つのレヴェル
Author(s)	重田, 謙
Citation	メタフュシカ. 2002, 33, p. 81-96
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66664
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

原因と理由

― 行為の因果説と反因果説の対立の三つのレヴェル

このうち、2と3の関係について検討する。ぜ」、3、行為の理由を問う「なぜ」、の三つである。本論は、の根拠を問う「なぜ」、2、因果連関における原因を問う「ないう問が存在すると思われる。それは、1、主張・信念などわれわれが営む言語ゲームには、三つの種類の「なぜ」と

という自然主義的な世界観である。まり世界をひとつにまとめあげる最も基礎的な概念である、にあるのは、「原因」こそが、心的なものと物的なもの、つ

重

田

謙

本論において、この因果説が因果説の主張をどの程度まで批なったレヴェルに分類される。第一は、行為と理由の関係をお主張される。第二は、行為の「理由」が「原因」であるとが主張される。第二は、行為の「理由」が「原因」であるとが主張される。第二は、行為の「理由」が「原因」であるとが主張される。第二は、行為の「理由」が「原因」であるとが主張される。第二は、行為の「理由」が「原因」であるとが主張される。第二は、行為の「理由」が「原因」であるとが主張される。第二は、行為の「理由」が「原因」であるとが主張される。第二は、行為の「理由」が「原因」であるとが主張される。第二は、行為の「理由」が「原因」であるとが主張される。第二は、行為の「理由」が「原因」であるとがというとは、反因果説が因果説の争点は、三つの異なったとき、それはどの程度まで批りない。

判できるのかというレヴェルにある。この場合、その批判が及ばない範囲において、因果説の妥当性は容認されることになる。この争点については、因果説の妥当難囲を大幅に限定する立場(アンスコム)を支持し、その論拠を与えることがする立場(アンスコム)を支持し、その論拠を与えることがあられる。第三の争点は、行為の理由は全て原因でありうるのかどうかというレヴェルにある。この争点は、第一の争点と対称をなしいうレヴェルにある。この争点は、第一の争点と対称をなりすることなく、その完全な妥当性を論証することはできない、ということが示される。

確認しておこう。 以上の点を論じる前に、行為の因果説の主張内容を簡単に

行為の因果説の主張内容とその論拠

ヴィドソンの因果説は行為の「主たる理由」(賛成的態度あよって惹き起こされた行為である」。本論で検討されるデイが行為の生起を説明する特定の心的な状態あるいは出来事にが行為の生起を説明する特定の心的な状態あるいは出来事にが行為の生起を説明する特定の心的な状態あるいは出来事にが行為の原因とみなすかによって、行為の因果

だと思われる。では、デイヴィドソンの因果説の主張内容とその説は、行為の因果説の中で最も有力で説得力に富む見解るいは欲求、と信念)を意図的な行為の原因とみなしている。

その論拠を具体的に見ていこう。

ある行為が意図的であるならば、行為者はその行為を合理 化する(説明する)理由をもっていなければならない。例え びねり、明かりがつくようにし、部屋を明るくし、空き巣狙 いに警告を与えたとしてみる。「なぜそのように指を動かし たのか」と問われるならば、「スイッチをひねるために」と たのか」と問われるならば、「スイッチをひねるために」と がは答えるだろう。またそのとき、明示的に述べられてはい ないが、指をそのように動かすことによってスイッチを ることができると彼は信じていた、と言うこともできるだろ う。デイヴィドソンによれば、前者で言及されているのが信 のである。そしてその両者が、行為の「主たる理由」と呼ば れることになるのである。では、ここでデイヴィドソンの因 果説を定式化しておこう。彼の主張は、次に示すC,C2とい う二つのテーゼから成っている。

は記述dのもとでXを合理化(説明)する主たる理由をCAが記述dのもとで意図的行為Xを行うならば、A

もっている。

C 行為の主たる理由は行為の原因である。 の主たる理由がRであるのは、以下の場合に限られる。 度(欲求)と、dという記述を与えられたXがその性質 度(欲求)と、dという記述を与えられたXがその性質 を備えているという行為者の信念とから成り立っている。

その特徴と妥当性を明確にするために、三つの観点からこその特徴と妥当性を明確にするために、三つの観点からことがあるのだろうか。ある意図的な行為をおこなうとき、われわれはそれを合理化する複数の理由を同時にもっていることがある。その場合には、Cだけでは、その複数の理由の中から実際の理由を選び出すことができないのである。次のような例を考えてみよう。ある人に財産家で子供のいない叔父がいるとする。彼は叔父の財産を相続したいと思っており、彼の国への叔父がアルバニアのスパイであると信じており、彼の国をもっており(欲求)、彼を殺すことがこの欲求を満たすための最も良い方法であると信じていた(信念)としよう。一方で、彼は、その叔父がアルバニアのスパイであると信じており、彼の国をもっており(欲求)、叔父を殺すことがこの欲求を満たすための最も良い方法であると信じていた(信念)とする。

こした、欲求と信念を選び出すことができるのである。とい。したがって、主たる理由として、実際に行為を惹き起たる理由とは実際に行為を惹き起こした原因でなければならの困難を克服することが可能となるのである。こによれば主の困難を克服することが可能となるのである。こによれば主の困難を克服することが可能となるのである。こによれば主ない。したがって、主たる理由として実際に叔父を殺害した。

第二に、行為の原因として主たる理由が選ばれているのは なぜだろうか。その見解は、R・チザムの意図的行為に関す る洞察に基づいている。意図的な行為、つまり「~できる (can)」「自由に~できる(be free to do)」を、因果的条件 法によって分析する試みがこれまでなされてきた。その因果 的条件法の候補として最初に思いつくのは次のようなものだ ろう。「~できる」=「もしある人が~しようと意図するな らば、彼は~するだろう(A person would ~ if he intended to~)」。この分析が正しいならば、~するだろう」という ことができる。しかしこの分析には困難が存在する。「もし ある人が~しようと意図するなち こと自体は真であっても、そもそも「~しようと意図すること と」ができない場合には、「(自由に)~できる」ということ と」ができない場合には、「(自由に)~できる」ということ

を用いたとしても同様にあてはまる。 選択する」「~しようとする(will)」「~しようと試みる(try)」のことは「~しようと意図する」の代わりに「~することをのことは「~しようと意図する」の代わりに「~することをら、つまり意図的な行為の正しい分析ではありえない。こということの正しい分析であるとしたら、矛盾が生じてしま

先述の議論によれば、行為から明瞭に区別されたことは、そ 株件法の前件(ff節)には、主要な動詞として、行為の動詞、 と有意味に問うことができる動詞は含まれてはならないということである。さもなくば、その分析は先に指摘されたのとうことである。さもなくば、その分析は先に指摘されたのといきる。もしなにかが意図的な行為の原因であるならば、それは行為から明瞭に区別されるのでなければならないといは行為から明瞭に区別されるのでなければならない。一方で、は行為から明瞭に区別されるのでなければならない。一方で、は行為から明瞭に区別されるのでなければならない。一方で、は行為から明瞭に区別されるのでなければならない。一方で、は行為から明瞭に区別されるのでなければならない。一方で、は行為から明瞭に区別されるのでなければならない。一方で、は行為から明瞭に区別されば、行為から明瞭に区別されば、一方で、とは、そ

分条件は次のように定式化できる。のはなぜだろうか。ちなみに因果説において意図的行為の十最後にCが意図的な行為成立の必要条件に限定されている

述dのもとで意図的行為Xを行う。 Xの原因である主たる理由をもっているならば、Aは記C Aが記述dのもとでXを合理化し、かつ(実際に)

鎖が存在するからなのである。その一例を示そう。行為成立の必要条件に限定されるのは、この逸脱的な因果連(wayward causal chain)と呼ばれている。Cが意図的ない場合がある。それは逸脱的ないし非標準的因果連鎖この十分条件の前件が満足されていながら、後件が成立しな

た険から逃れたいと思い、ロープを握る手を緩めれば重危険から逃れたいと思い、ロープを握る手を緩めれば重なと危険から逃れることができることを知っていたとしよう。このような信念と欲求が彼をひどく狼狽させんでいるだろう。だがこの場合、彼は、決して手を緩めありうるだろう。だがこの場合、彼は、決して手を緩めれば重からと決めたわけではないし、また、意図的にそうしたようと決めたわけではないし、また、意図的にそうしたようと決めたわけではないし、また、意図的にそうしたようと決めたわけでもないのである。

足している。以上が、デイヴィドソンが、主たる理由を行為明らかに、賛成的態度(欲求、信念)はその二つの条件を満あるようなもうひとつの行為であってはならない。そして、

れについて「~することができるか」と問うことが有意味で

の原因に選ぶ理由である。

練はなされていない。 無はなされていない。 は、この逸脱的な連鎖の事例を取り除くために、Cに、信念と は、この逸脱的な連鎖の事例を取り除くために、Cに、信念と は、この逸脱的な連鎖の事例を取り除くために、Cに、信念と は、この逸脱的な連鎖の事例を取り除くために、Cに、信念と は、この逸脱的な連鎖の事例を取り除くために、Cに、信念と は、この逸脱的な連鎖の事例を取り除くために、Cに、信念と は、この逸脱的な連鎖の事例を取り除くために、Cに、信念と

れる(Сは、行為の因果説と共有されている)。のような二つの条件で、こから構成することができると思わに、行為の反因果説の定式化を与えておきたい。それは、次その論拠を示すことができたと思う。では本節の締めくくり以上で、デイヴィドソンによる行為の因果説の特徴および以上で、デイヴィドソンによる行為の因果説の特徴および

もっている。 は記述dのもとでXを合理化(説明)する主たる理由をC.Aが記述dのもとで意図的行為Xを行うならば、A

のにかぎる。

C 行為の主たる理由は、行為者が行為の合理化(説明)

でを付け加えれば、「原因」という概念に訴えることなく、Cを付け加えれば、「原因」という概念に訴えることなく、のまであるがは信念)ではなく、欲求(あるいは信念)見かけ上の「主たる理由」を取り除くことができる。例えば、見かけ上の「主たる理由」を取り除くことができる。例えば、

因果説と反因果説の対立点 (一)

looking)の関係と称することができるだろう。目的論的関係、また、時間的には未来視向型(forward-「~するために~する」と記述される〈理由-行為〉関係は、イッチをひねる」という現在の行為なのである。したがって

今の例から、もうひとつの〈理由‐行為〉関係を読み取る今の例から、もうひとつの〈理由‐行為〉関係は、「同年をことができる。スイッチをひねるという行為は、その理由をに「部屋を明るくすること」等々として再記述することが可能となる。ここでは、同一の行為が、異なった記述の下におかれているのである。このような〈理由‐行為〉関係を読み取るすることができるだろう。

えない。よって、行為の主たる理由はその原因である。つまを知る。というに述べる。この文は、行為者がその理因果説論者は次のように述べる。この文は、行為者がその理由をもつがゆえに当の行為をなした、ということを意味している。したがって、この「ゆえに」は二つの文をたんに並列いる。したがって、この「ゆえに」は二つの文をたんに並列いる。したがって、この「ゆえに」は二つの文をたんに並列いる。したがって、この「ゆえに」は二つの文をたんに並列している。その関係として因果関係以外に適切な関係はありしている。その関係として因果関係以外に適切な関係はありしている。その関係として因果関係以外に適切な関係はあり、この対象に、このではなく、それらにある関係が存在することを示している。その関係として因果関係以外に適切な関係はあり、この対象に、この対象に、

となるかもしれない点をひとつ指摘しておきたいと思う。先

ねるということが惹き起こされた」というように。例えば「電灯をつけたいということによって、スイッチをひ次のように書き換えることができると考えているのである。り因果説論者は、「ゆえに」を用いて記述された命題はすべて、

とができる―については、反因果説論者から説得力のある議 とである。第一の反論―これは「正面からの反論」と呼ぶこ 因果関係であると仮定した場合の理論的な欠陥を指摘するこ 係を提示することである。第二の反論は、この「ゆえに」が するものとして、因果関係以外に説得力のあるなんらかの関 のであるかどうかは依然として未解決のままなのである。 のであるか、あるいはそれ以外のもの、例えば目的論的なも ということのみである。そしてその説明の種類が因果的なも とが示しているのは、行為の理由はその行為を説明している、 続詞ではない「ゆえに」を用いて記述できる。しかしそのこ されている。たしかに理由と行為の関係はたんなる並列の接 論者の強硬な主張に対しては、次のような応答が一般的にな えに」を説明するのは因果関係以外ありえないという因果説 論は提示されていないというのが実情である。ただし、「ゆ の反論が可能である。第一の反論は、この「ゆえに」を説明 この議論に対して、反因果説論者からは、二つのレヴェル この「ゆえに」が目的論的な関係であるとして、その論拠

86

に述べたとおり、理由と行為の間に成立する「ゆえに」の関係は、全て「ために」を用いて書き換えることが可能である(例えば、「電灯をつけたかったがゆえに、スイッチをひねった」を「電灯をつけるために、スイッチをひねった」を「電灯をつけるために、スイッチをひねった」を「電灯をつけるために、スイッチをひねった」へ、とかっように)。しかし、通常の因果関係については、そのような書き換えは不可能である。例えば「その物体は水の中に置かれるために、水に溶けた」へと置換することは決してできない。この文法的な事実は、この「ゆえに」が目的論的関係のたんなる言い換えにすぎないということを示しているのでのたんなる言い換えにすぎないということを示しているのでのたんなる言い換えにすぎないということを示しているのでには一体いかなる関係なのか。その点について十分な説明が与えられない限りこの反論は有効ではない、と。

である。

である。

いずれにせよ、説得力のある「正面からの反論」を提示でいずれにせよ、説得力のある「正面からの反論にはよい。次節では、そうした因果説批判のひとつを検討する。しかし、それを取り上げるのはそれが反論として検討する。しかし、それを取り上げるのはそれが反論としてがある。

三 行為の因果説の定式化

その批判は次のようなものである。

ない。したがって、それらは原因とはなりえない。いるが、それらは状態ないし傾向性であって出来事では主たる理由は賛成的態度(欲求)と信念から構成されて

えない。(結論)よって主たる理由は原因とはなり、出来事ではない。(結論)よって主たる理由は原因とはなり、成的態度(欲求)および信念は状態あるいは傾向性であって、成的態度(欲求)および信念は状態あるいは傾向性である賛

ンは認めている。状態や傾向性を引き合いに出して、「あるでありうると結論づけるのは早計であることをデイヴィドソの飛行機は気温が異常に高かったがゆえに離陸時に墜落しの飛行機は気温が異常に高かったがゆえに離陸時に墜落しの飛行機は気温が異常に高かったがゆえに離陸時に墜落した」「その皿はひびが入っていたがゆえに離陸時に墜落した」「その地判に対してデイヴィドソンは次のように反論する。この批判に対してデイヴィドソンは次のように反論する。

出来事の因果的条件に言及することがその原因を与えたこと出来事の因果的条件に言及することがその原因を与えたこと出来事の因果的条件に言及することがその原因を与えたこと出来事の因果的条件に言及することがその原因を与えたこと出来事の因果的条件に言及することがその原因を与えたこと出来事の因果的条件に言及することがその原因を与えたこと出来事の因果的条件に言及することがその原因を与えたこと出来事の因果的条件に言及することがその原因を与えたこと

たということが腕を上げるということを惹き起こした」と記分類することができる。第一の種類は、傾向性や状態つまり分類することができる。第一の種類は、傾向性や状態つまりとしては出来事ではないが、しかし、状態や傾向性はそれ自体としては出来事ではないが、しかし、状態や傾向性はそれ自体としては出来事ではないが、しかし、状態や傾向性とれらないり、知ったり、思い出したりする瞬間に信念が生ずるかもしれない」。第二の種類は、なんらかの知覚である。例えめたり、知ったり、思い出したりする瞬間に信念が生ずるかめたり、知ったり、思い出したりする瞬間に信念が生ずるかめたり、知ったり、思い出したりする瞬間に信念が生ずるかめたり、知ったり、思い出したりする瞬間に信念が生ずるかめたり、知ったり、思い出したりする瞬間に信念が生ずるかめたり、知ったり、思い出したりする瞬間に信念が生ずるかもしれない」。第二の種類は、なんらかの知覚である。例えるようとが腕を上げるということを惹き起こした」と記が想定されているのだろうか。それは二つの種類の出来事にはある人が、交差点に近づき、合図をするために腕を上げたとする。因果説論者であれば、そのことを「合図をした」と記が思する。因果説論者であれば、そのことを「合図をした」と記述は、主たる理解に表する。

いだろうう。

いだろうう。

いだろうう。この場合の主たる理由「合図をしたいこと」

が対な知覚に限られない。心像を伴なったり伴なわなかっ

の外的な知覚に限られない。心像を伴なったり伴なわなかっ

の外的な知覚に限られない。心像を伴なったりといることの認知」

ここまでの議論に基づいて因果説の主張を定式化してお

く。

密接に関連した出来事が存在すること。②主たる理由に現が出来事として経験されていること。②主たる理由の突然の出が、それが合理化する行為を惹き起こした。が、それが合理化する行為を惹き起こした。

える必要があるだろう。がある。その曖昧さを解消するためには、次の規準を付け加がある。その曖昧さを解消するためには、次の規準を付け加条件②の「密接に関連した」という表現には曖昧なところ

次の種類の問いに対して行為者当人が与えることができ規準C。「主たる理由に密接に関連した出来事」とは、

することになったのか」。りして、あるいはどのような考えや心像が生じてそれをるものに限る。「あなたは何を見たり聞いたり、感じた

意図的な行為の中で、テーゼCの条件①を満足するケースであったい」という傾向的な欲求から隣人に挨拶するようしくありたい」という傾向的な欲求から隣人に挨拶するようとの場合、主たる理由に密接に関連した出来事を見出すのはな場合は行為の因果説になじまない、と主張している。しかな場合は行為の因果説になじまない、と主張している。しかな場合は行為の内果説になじまない、と主張している。しかな場合は行為の中で、テーゼCの条件①を満足するため、因果説が妥当することになるのである。

手がかりに、再々反論を試みたいと思う。当なのだろうか。次節では、アンスコムによる因果説批判をでは、このような内容をもつデイヴィドソンの再反論は妥

四 行為の因果説と反因果説の対立点 二

るいは意図)についてはそれが原因でありうることを認めているわけではない。彼女は特定の要件を満たす主たる理由(あアンスコムは反因果説論者だが、因果説を完全に否定して

に表明されている。いる。そうしたアンスコムの立場は、次のような叙述に明いる。

identifiable state of a human being)、すなわち彼がある特定の意図をもっていることは、さまざまなこと―その中にはその意図がそれをなすための意図であったことを行うことさえ含まれるのだが―の生起を惹き起こすかもしれない、と言うこと。一方で、ある行為が(行為の以前に存在した)特定の意図の充足において為されるということは、ただそのことのゆえにその先行する意図によって惹き起こされるということである、と言うこと。それらは全く別の事柄である。

ているのである(先に指摘したとおり、大多数の意図的行為性を容認しているのである。前節の因果説の定式化に基づけ性を容認しているのである。前節の因果説の定式化に基づけば、彼女の立場は次のように表現できる。テーゼCが成立すぶ、彼女の立場は次のように表現できる。テーゼCが成立する可能性は認めるが、それはテーゼCの条件①が満足されるようなケースについては、万里説は妥当しないとみなした。

はこのケースに属する)。

考もそのような欲求の感覚(any feeling of desire)も生じ りえないと考えているのである。 件①が満足されない場合、それは意図的な行為の原因にはな 理由が明確でも同定可能でもない場合、つまりテーゼCの条 ていなかったのである。アンスコムは、このように、主たる である。そしてそのときには、電話を通じさせようという思 いように思われ、それから余計な力を加えたということだけ すぎない。内省と観察によって知られるのは、電話が通じな れは特別な力を加えるという出来事の後で形成された事実に にするという目的のための手段だったのである。しかし、そ りダイヤル盤に余計な力を加えたことは、電話を通じるよう ば、「電話を通じるようにするために」と彼は答える。つま 盤に余計な力を加える。なぜそうしたのかと尋ねられたなら る人が電話をかけてなかなか通じないので、電話のダイヤル 彼女自身が挙げる例を通じてその点を確認しておこう。 あ

は、1,意図(欲求・信念)を外的あるいは内的に実際に言ある。意図したことが特定のときに心の前にある場合で能なのは、意図したことが特定のときに心の前にある場合で能なのは、意図したことが特定のときに心の前にある場合での条件①が満足されるのは)、具体的にどのような場合だろの条件のが満足されるのは)、具体的にどのような場合だろ

ことができるだろう(これを以降、規準Cと称する)。同定するのに十分ななんらかの感覚を感じたこと、をあげるんらかの像が思い浮かぶこと、3,ある欲求、信念の出現を明した場合、2,意図されたことあるいはそれに関連したな

示したいと思う。のだろうか。われわれは以下で、その立場を支持する論拠を限定するのだが、この立場を支持することははたして可能な限定するのだが、この立場を支持することははたして可能な以上で見たようにアンスコムは因果説の妥当範囲を大幅に

例えば、私がテレビのCMを見ていて、のどの渇きの感覚

を感じながら、心の中で「ビールが飲みたいなあ」と言う。を感じながら、心の中で「ビールが飲みたいなあ」と言う。を感じながら、心の中で生じた出来事である。しかし、条件で、それは私の中で生じた出来事である。しかし、条件とい、ダイヤル盤に余計な力を加える。なぜと問われるならば「電話を通じるようにするため」と答えることができるといい、ダイヤル盤に余計な力を加える。なぜと問われるならば「電話を通じないように思われたことと余計な力を加えたことだけなのである。この場合には、明確に同定可能であり、たことだけなのである。この場合には、明確に同定可能であり、たことだけなのである。この場合には、明確に同定可能であり、と言う。と感じながら、心の中で生じた出来事や状態など何も存在しないのである。

で起こった出来事の想起であったりするだろう。つまり自分かくその理由を問われて答えることができるのだから、君のかくその理由を問われて答えることができるのだから、君のおる人が私に、「なぜ、あの時あそこにいたのか」と尋ねる。ある人が私に、「なぜ、あの時あそこにいたのか」と尋ねる。ある人が私に、「なぜ、あの時あそこにいたのか」と尋ねる。おけれるであったのかは失念してしまった。そして、それを思い出そうとする。そのときにするのは、例えばスケジュール帳を見ることであったり、その前後の自分の行動や自分の周囲を見ることであったり、その前後の自分の行動や自分の周囲を見ることであったり、その前後の自分の行動や自分の周囲を見ることであったり、そのような例を考えている。

のである。であれ、感覚であれ―を思い出そうとはしないであれ、心像であれ、感覚であれ―を思い出そうとはしないそして、ほとんどの場合、そのときの自分の内的過程―内語がそのとき、置かれていた状況を思い出そうとするのである。

と、 と、たいていの場合、行為者が身を置いていた状況である。それは、行為者の心の中にある状態ではなく、明らかに行為者れは、行為者の心の中にある状態ではなく、明らかに行為者が外的な状況であろうが、内的な過程であろうが、その主たる理由が帰属されたときの行為者の状態が引題なのである。その状態こそが意図的な行為を惹き起こした原因なのである。その状態こそが意図的な行為を惹き起こした原因なのである」と。

き、合図をするために手を上げる。それぞれの場合、当人に異なる場所と異なる時に、車を運転していて、交差点に近づし、外的な状況を根拠に主たる理由が行為者に帰属される場し、外的な状況を根拠に主たる理由が行為者に帰属される場の的な過程を根拠にして主たる理由が行為者に帰属される場所的な過程を根拠にして主たる理由が行為者に帰属される

意識されていた内的な過程は全く異なっているということは 十分想定可能だろう。ある場合は、特にどんな思考も映像も 十分想定可能だろう。ある場合は、特にどんな思考も映像も とした安堵を感じていたかもしれない。別の場合には、反対車線 とした安堵を感じていたかもしれない。これらのケースで同 とした安堵を感じていたかもしれない。これらのケースで同 という行為者を取り巻く外的な状況のみである。このとき、 かずれのケースにおいても行為者は、「合図をしたかったが ゆえに手をあげた」と言うことができるだろうが、「そのと きの内的過程が手を上げるということを惹き起こした」とは 言わないだろう。したがって先のような反論はやはり無効だ と言わなければならない。

図的な行為の範囲は極端に限定されることになるだろう。その議論が妥当であるとするならば、因果説が適用される意以上が、アンスコムの立場を支持する論拠である。そして

五 行為の因果説と反因果説の対立点 三

ることは不可能である、ということを示したい。その困難は、しても、因果説が意図的な行為全般に妥当することを論証すこの節では、なんらかの仕方で前節の批判を克服できたと

にある。次のような例を考えてみよう。
②を満足することのない行為がたしかに存在する、という点われわれの意図的行為の中には、テーゼCの条件①あるいは

現を経験してもいないと仮定する。 ある人が、コーヒーを作り、それを机の脇に置き(A)、ある人が、コーヒーを作り、それを机の脇に置き(A)、 のCDを選び、ステレオの電源を入れ、CDをかけ(A)、ワーの電源を入れ(A)、机に向かう。この一連の行為は「論文を書く準備をする」行為と記述されるだろう。これらの行為は「論することが完全に習慣化されているかもしれないし、この順序で準備をいていの場合はそうではないだろう。ここでは、準備の順たいていの場合はそうではないだろう。ここでは、準備の順なについて意図も習慣も成立していないし、欲求・信念の出現を経験してもいないと仮定する。

と)。しかし、そのような順番で準備をするにあたっては、えば、時計を見て「そろそろ始めよう」と独り言を言ったこる理由には、それに先行する出来事があるかもしれない(例る理由には、それに先行する出来事があるかもしれない(例えば、一様に「論文を書くれぞれについてなぜと問われるならば、一様に「論文を書くさて、もちろんこれらの各行為は意図的な行為である。そ

とは何であろうか。
とは何であろうか。
とは何であろうか。
とは何であろうか。
とは何であろうか。

れの中でたまたま灰皿が目に付いたこと等)。しかしこのよれの中でたまたま灰皿が目に付いたという出来事(A)が、コーヒーを作ってそれを机に置いたという出来事(A)が、は来事を、Aに関する信念に「密接に関連した」出来事と呼ぶことはできないだろう(この場合と、交差点に近づいた運転手の場合を比較してみよ。合図しようという欲求に密接に関連した出来事としては、交差点に近づいていることの認知という出来事としては、交差点に近づいていることの認知という出来事としては、交差点に近づいていることの認知という出来事を上である)。したがって、A以外に、Aに関する信念の生起を説明する別の出来事が存在しなければならない。行為者はこのような場合でも、信念に「密接に関連した」出来事を指摘できるかもしれない(例えば、行為の流れの中でたまたま灰皿が目に付いたこと等)。しかしこのよれの中でたまたま灰皿が目に付いたこと等)。しかしこのよれの中でたまたま灰皿が目に付いたこと等)。しかしこのよれに引き続く行為の流をれた引き続く行為の流をれた引き続く行為の流をれた引き続く行為の流をれた引き続く行為の流をれた。

えられることのほうが普通だろう。うなケースでは「特に何も思い当たらない」という答えが与

だけなのである。

だけなのである。

だけなのである。

なが、そうしたのは、雨音らしきものに気づいて外のめる。彼が、そうしたのは、雨音らしきものに気づいて外のめる。彼が、そうしたのは、雨音らしきものに気づいて外のめる。彼が、そうしたのは、雨音らしきものに気づいて外のが帰ってくるばかりである。ただなんとなく窓際に出て、外の風景を眺めるだけなのである。

れに対して次のように答えている。 だイヴィドソン自身はこうしたケースの存在を認めて、そ

しかし、そのような原因もしくは因果の連鎖があったとを惹き起こした)原因もしくは因果の連鎖を知らないが、あ。すなわちわれわれは、その倒壊にまで導いた(それる。すなわちわれわれは、その倒壊の説明に類似していめ、、
は、構造的な欠陥による橋の倒壊の説明に類似している。
ながらも、自分が現に行為したときな意図的行為でありながらも、自分が現に行為したときな

いうことには確信を抱いているのである。(8)

先行する出来事が存在しなければならない、と。る以上、たとえわれわれに知られていないとしても、それにえている。主たる理由による行為の説明は、因果的説明であ出来事を見出しえない場合についてデイヴィドソンはこう考出の叙述によれば、主たる理由に密接に関連した先行する

別的事例について、先行する出来事を経験的に確定するなん一般的な論証は不可能だとしても、このケースに属する個

類の関係が成立している出来事を確定できること、である。というという欲求」)との間に成立しているのと同じ種関連した出来事(例えば「交差点に近づくことの認知」と「合理由に先行する出来事の中から、主たる理由とそれに密接に関連した出来事(例えば「交差点に近づくことの認知」と「合いでした。という欲求」)との間に成立しているのと同じ種類の関係が成立している出来事を指摘できない場合に、2、その主うな方法は次のらかの方法が存在するかもしれない。そのような方法は次の

う。 間にある種の架橋法則が発見されたとしよう。そのとき、 訴える道である。心理学的な状態と神経生理学的な状態との 理由に対して「密接に関連した」出来事を確定できるであろ んらかの神経生理学的な過程の存在が確認されるかもしれな 認知」と「合図をしようという欲求」)との間に特徴的なな たる理由と密接に関連した出来事(「交差点に近づくことの られないからである。残されるのは、神経生理学的な知見に 外方法がなく、そしてそれについて行為者当人から回答は得 ない。というのも、それを知るには行為者自身に確認する以 主たる理由に密接に関連しているかどうかを知ることはでき 通じて判明したとしよう。しかし、この場合、その出来事が い。それに基づけば、ここで問題になっている種類の主たる るタイプの出来事が先行することがその人の振舞いの観察を 例えば、そうした種類の行為をある行為者がなす場合、 しかし、この道はデイヴィドソンの理論の枠組において

のう。 (空) なくともそのような法則の存在を論証しなければならないだなくともそのような法則の存在を論証しなければならないだなからである。またこのような道に訴える因果説論者は、少いのらである。またこのような道に訴える因果説論者は、少い方のも、そもそもデイヴィドソ

小結

まり因果説の批判に向かわざるを得ないだろう。 でいない。「ゆえに」を説明する因果関係以外の代替案を提これまでのところ反因果説側からは説得的な議論は提出されこれまでのところ反因果説側からは説得的な議論は提出されまが、「ゆえに」を説明に関わっていた。この争点に関しては、記述の関係、「~したいがゆえに(because)~した」の、「ゆ記述の関係、「~したいがゆえは、理由と意図的な行為の因果説と反因果説の第一の争点は、理由と意図的な行為の

か、①が満足されなければならないのか、という争点であった。具体的には、それが合理化する行為を惹き起こした)成立のたる理由が、それが合理化する行為を惹き起こした)成立の条件としては、①(「主たる理由の突然の出現が出来事とした経験されていること」)②(「主たる理由に密接に関連したの議論である。具体的には、それは、テーゼC(ある人がもっている主にの争点は、因果説が妥当する範囲に関する争いであっ

囲は流動的である、と言える。議論ではないかもしれない。その場合、因果説が妥当する範する立場)を支持する論拠を示した。だが、それは決定的なた。本論においては、後者の立場(因果説の妥当範囲を限定

可能性も残されていないのである。

可能性も残されていないのである。

可能性も残されていないのである。

可能性も残されていないのである。

可能性も残されている。しかし、因果説には、

をの全面的な妥当性を論点先取りに陥らずに一般的に論証する可能性も、また科学の発展がそれに経験的な確認した。

との全面的な妥当性を論点先取りに陥らずに一般的に論証する可能性も残されている。しかし、因果説には主たる理由に「密接に関

という主張を、本論の(あくまで暫定的な)結論としたい。①が満たされる場合は)「家族的類似性」を示す概念である因」は、特定の条件下において(少なくともテーゼCの条件因」は、理由」と「原因」は完全に異質な概念であるかましれない。「理由」は全て「原因」によって説明されるかもしれない。

注

している。Cf., L.Wittgenstein, 'Cause and Effect', in J.C.Klagge (1) Cf., L.Wittgenstein, 'Cause and Effect', in J.C.Klagge

- Hackett publishing company, 1993 and A.Nordmann (eds), Philosophical Occasions 1889- 1951
- 2 Cf., R.Hursthouse, 'Intention', in R.Teichmann (eds), Logic, Cause University Press, 2000, p.84 & Action: Essays in honour of Elisabeth Anscombe, Cambridge
- 3 書房、一九九○年、七頁、参照。 ない。D・デイヴィドソン『行為と出来事』服部裕幸他訳、勁草 もちろんその逆でもその行為を合理化できることは言うまでも 明示的に言及され、信念は言及されないという例を挙げたが、 及するのは一般には余計なことである」。ここでは、欲求の方が デイヴィドソンが述べるように、主たる理由の「両者ともに言
- 4 以上で挙げられたふたつの例は、S・エヴニン『デイヴィドソン』 宮島昭二訳、勁草書房、一九九六年、一〇一頁からのものである。
- 5 Cf., D.Davidson, Essays on Actions and Events, Clarendonpress 1980, pp.68-73
- 6
- 7 三〇四頁、参照。 ている。Cf., Davidson, op. cit., p.79. デイヴィドソン、前掲訳書 な仕方で意図的行為に関する十分条件を与える可能性を断念し デイヴィドソン自身は、 逸脱的因果連鎖の事例を取り除くよう
- 8 この用語は、G・E・M・アンスコム『インテンション』菅豊彦訳、 産業図書、一九八四年、四〇頁に依拠している。
- 9 S.Schroder (eds), Wittgenstein and Contemporary Philosophy of Cf., Hursthouse, p.96, S.Schroder, 'Are Reasons Causes?', in Mind, Palgrave, 2001, p.152
- $\widehat{10}$ デイヴィドソン、前掲訳書、一五頁。
- デイヴィドソン、前掲訳書、一六頁。
- アンスコム、前掲訳書、三三頁、参照。
- $\widehat{13}$ $\widehat{12}$ $\widehat{11}$ Cf., S.Schroder, op. cit., pp.157-161
- R・ハーストハウスも同様の立場を表明している。Cf., Hursthouse

- 15 G.E.M.Anscombe, 'The Causation of Action' in C.Ginet and Press, 1980, p.184 S.Shoemaker (eds), Knowledge and Mind, Cambridge University
- G.E.M.Anscombe, 'Events in Mind' in The Collected Philosophical of Mind, Blackwell, 1981, p.63. Papers of G.E.M.Anscombe, vol.II, Metaphsics and the Philosophy

16

- 18 17 この例は、ハーストハウスの論文から着想を得ている。 Cf., Hursthouse, op. cit., pp.91-92.
- デイヴィドソン、前掲訳書、一七頁。

19

Cf., Davidson, op. cit., p.222. 例えば、架橋法則の存在しないこと か分からない)命題を信じるということはそもそも不可能であろ 神経生理学的な状態を産出することができる。その場合、その人 らず、そのような言葉を聞いたこともないある人について、その 曜日という観念がその生活において全くなんの役割も果たしてお 可能であろう。すると例えば、銀行も時計も存在していず、また この心理学的な状態の十分条件である神経生理学的状態は、その 成立の十分条件であると仮定しよう。その心理学的状態を例えば あるタイプの神経生理学的な状態の成立がある心理学的な状態の れる(cf., G.E.M.Anscombe, 'The Causation of Action', pp.182-183)" の論証の一例として、アンスコムによる次のような議論があげら きない(つまりその環境においてそれをどのように使用してよい 属しなければならなくなる。しかし自分がその意味を全く理解で について「銀行Bは木曜日の9時に開店する」という信念を帰 ような信念が自然に生ずる状況の外で、人工的に産出することが 「銀行Bは木曜日の9時に開店する」という信念だとしよう。

んげたけん 哲学哲学史・博士後期課程